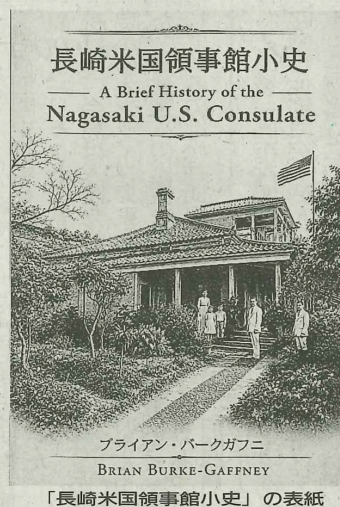


長崎米国領事館 80年の変遷 バークガフニ氏が「小史」執筆



長崎総合科学大名誉教授のブライアン・バークガフニさん(76)が「長崎米国領事館小史」(フライング・クレイン・プレス)を出版した。幕末から太平洋戦争直前まで約80年間、長崎に設置されていた長崎米国領事館の歴史をまとめた。

同書によると、長崎米国領事館は幕末の1859年、長崎・広馬場に開設。移転を繰り返して、1921年に大浦5番地(現大浦町)に落ち着いた。日米関係の悪化に伴い41年に閉鎖。建物は70年に取り壊された。

同書は、初代のウォルシュから最後のタワーマで歴代領事の詳しい活動と領事館を巡る動きを追った。領事館が置かれていた当時の東山十二番館(東山手町)の貴重な平面図をはじめ、写真や絵はがきなど図版も豊富に交えた。

今年9月、大浦の領事館跡地に社会医療法人春回会グループの出島病院が開院。長崎日米協会が病院前に領事館の説明板を設置した。春回会の井上健一郎理事長の依頼を受け、バークガフニさんが小史を執筆した。

バークガフニさんは「これまでは長崎米国領事館に関するまとまった資料がなかった。長崎の発展とどのように関わったのか知ってほしい」と話している。

B5判。83ページ。1430円。長崎市の好文堂書店、メトロ書店で販売中。問い合わせはフライング・クレイン・プレス(メール fivingscranepress@yahoo.co.jp)。(松尾潤)